

「石山詣で」考：『更級日記』における

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西木, 忠一 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4640

「石山詣で」考

— 『更級日記』における —

西 木 忠 一

一

寛徳二年（一〇四五）「霜月の二十余日」に初度石山詣でを果した菅原孝標女は、時に三十八歳であった。「今は、昔のよしなし心もくやしかりけり」とすつかり分別もつき、思えば「親の物へゐて参り」などもなく、今に至ってしまったことも「もどかしく思ひ出でら」れたので、真冬に近江の石山寺へと向かったのであった。

右の冒頭に關して、「前段の気ままな宮仕え生活とは明らかに段落を画し、家庭に定着してゆこうとする作者の姿勢を示すものである」との評も見えるところであつて、少女時代から橘俊通との結婚を経て、祐子内親王家出仕をするに至り、源資通との関わりの生じた時期の彼女とは、あまりに一変する日記の展開であると見える。

だが、ここに至る彼女の心の変移は予想外のものではなかつた。日記記述の面から見ればあまりに唐突な冒頭と見えようが、実は当然のなりゆきであつた。

彼女が「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、るまでに、その兆しは数度にわたつて記されて

いた。それをここで辿ってみよう。

『更級日記』において、作者が物語に憧れ、現実にはあり得ぬであろう結婚を夢想して来たことを、「よしなし事」とはじめて記したのは、長元五年（一〇三二）八月ばかりの「大秦ごもり」の条である。その時彼女は二十五歳であった。七日さぶらふほども、ただあづま路のみ思ひやられて、よしなし事（事）からうじてはなれて、「平らかにあひ見せたまへ」と申すは、私もあはれと聞き入れさせたまひけむかし。

と日記に見えて、たわいもない空想の世界を「からうじてはなれ」、父との再会を念ずるのであって、父の身を思う故の「からうじて」程度の変化であった。

ところが、それから八年後の長久元年（一〇四〇）春ごろの、橘俊通との結婚と思われる時に、光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治にかくしすゑたまふべきもなき世なり。あなものぐるほし。いかに、よしなかりける心なり、と思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはてず。

と、「多くの年月を、いたづらに臥し起きし」て来た過去を悔いながら、それでは実直一途に暮らすかといえはそうでもなく、「おこなひをも物詣をもせ」ずにただ無為に過ごして来たのであった。つまり、「まめまめしく過ぐす」のではなくていたづらに日を送る己を、「よしなかりける心」を持つ身だと「思ひしみはて」たのである。

それから約四年後の石山詣でにおいては、「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、……」と進む。三十八歳にして「思ひ知りはて」た彼女は、実行に移して石山へ向かった。

加えて、彼女の父母が関係していよう。

彼女に祐子内親王家との関わりが生じたのは長暦三年（一〇三九）三十二歳の初冬であり、翌長久元年（一〇四〇）には橘俊通と結婚したらしく、翌長久二年（一〇四一）は夫不在中の気楽な宮仕えを経験している。そして、翌長久三年（一〇四二）から寛徳二年（一〇四五）まで宮仕えを続けた。こうした事実立脚して、津本信博氏は「長久三年から、寛徳二年までは作者は宮仕えを試みているので、その間は服喪期間に該当しなかつたと判断されるので、孝標の死去年は、

長久元年か二年の頃であったとしてもよいかも知れない」と推定された。^(注4)

津本氏の推定に従って、加えて母の死去年次も父孝標と大差なき頃と想定すれば、孝標女が過去の自分を「よしなし」と判じ、石山詣でを決行するに至る心は納得できるところである。

二

この時の彼女の願望は、

- (1) 「ひとへに豊かなるいきほひ」になること。
 - (2) 「ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて」ること。
 - (3) 「わが身もみくらの山につきみ余るばかりにて、後の世までのことを思」うこと。
- の三点であった。

(1)は「豊かなるいきほひ」つまり蓄財による生活の安定を願うもので、夫橘俊通は下野守(後年は信濃守)に任せられていて、その妻である彼女は「財力」という物質上の願望が何よりもまず第一だったのである。

(2)は夫との間の子「仲俊」らを指していて、彼らを「思ふさまにかしづく」というのだから、子の母親としての彼女の姿が彷彿とする。現実には立脚した母親としての現時点における彼女の姿には、やはり若き日の彼女からはいささか想像の域を越えるものがある。この時、仲俊は五歳位であったろうか。

(3)は(2)の「ふたばの人」に対する「わが身」であって、自分は財力を蓄えた上は後世の安楽を願うというものであり、「この当時の浄土教受容の典型的な形」^(注5)であった。

こうして、孝標女は「雪うち降り」来る道を近江石山へと辿った。

逢坂の関に至って「逢坂の関のせき風ふくこゑはむかし聞きしにかはらざりけり」と心に詠じた。彼女が「昔越えし」

折は、寛仁四年（一〇二〇）「師走の二日」の夕方であったから、既に二十五年が過ぎ去っていた。あの時「駿河の清見が関と、逢坂の関」以外に、身にしみて感じるころは他に「なかりけり」と日記に記していた。それほどまでの感銘を受けた逢坂の関で、「そのはどしも、いとあらく吹く」嵐を身にうけて詠じたのであった。杉谷寿郎氏は「その関で『そのはどしも、いとあらく吹いたり』という風は、実際のことであるが、それに注目したのは『逢坂の嵐の風』『古今集』九八八、よみ人しらず）が詠みつがれてきた表現世界のものであったからであろう」と述べられた。それは、

『古今和歌集』卷第十八（雑歌下）

題しらず
よみ人知らず

逢坂の嵐の風は寒けれどゆくへ知らねばわびつつぞ寝る

の歌であって、悠久不変の自然に対する自分の変化を、孝標女はしみじみ感じたことであった。

ところで、『今昔物語集』卷第二十四、「源博雅朝臣、会坂の旨の許に行く語、第二十三」の「蟬丸」の歌にあふさかのせきの嵐のはげしきにしひてぞゐたる世をすこすとて

と見え、また『千載和歌集』卷第五（秋歌下）

嘉応二年法住寺殿の殿上歌合に、関路落葉といへる心をよみ侍りける

権中納言実守

もみぢばを関もる神にたむけおきてあふ坂山をすぎる木がらし

も見えて、逢坂の関と嵐吹く風とはとりわけ冬の景物として深い関係にあったことを付記しておこう。

続いて、「関寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいとあはれなり」と、関寺を見るに至った折の感慨を記している。

「関寺」は「世喜寺」とも記し、創建時代不詳。『関寺縁起』には、

会坂関東有「仏場之旧掘」

と見えて、逢坂の関の東側の街道沿いにあったという。『石山寺縁起絵巻』（第三卷）には、逢坂の関近辺に関寺山門らし

き建物が見えるところから、縁起繪卷作者は両者の位置を近辺に考えていたらしいことが判るであろう。

『日本紀略』によれば天延四年（九七六）六月十八日の条に

癸丑。申刻。大地震。其響如雷。

とあり、また『扶桑略記』には、

申時。有大地震。内裡築垣頽。天下舍屋。京洛築垣。皆以頽落。……近江国分寺大門倒。二王悉碎損。国府廳并雜屋
卅余宇顛倒。関寺大仏碎損。

と記録されていて、この地震によって国分寺大門・関寺大仏そして崇福寺などが碎破した。なお、寛仁二年（一〇一八）、
恵心僧都・弟子延鏡によって関寺本尊が、また治安二年（一一〇二）に伽藍がともに再建されたことであった。この
ことに關しては『関寺縁起』に、

寛仁二年閏余四月二十四日下刀、同五月二十一日終功、仏像已成、又自治安元年七月九日創伽藍宮作、二年八月十九日
半終其功、

と見える。

孝標女は、今やつとここに「関寺のいかめしう造られたる」さまを見るに及んだのであった。

(1) 関近くなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六の仏の、いまだ荒造りにおはするが、
顔ばかり見やられたり。あはれに人はなれて、いづこともなくておはする仏かなとうち見やりて過ぎぬ。（寛仁四年）

(2) 関寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、年月の過ぎに
けるもいとあはれなり。（寛徳二年）

と、二十五年以前の帰洛の折に拝した関寺の大仏の「荒造り」であったことが、二度記されている。それは彼女がいかに
心残りな思いで十三歳の冬に拝したかを示し、二十五年が過ぎた今もその折を思い浮かべ懐かしむ中に、ひたすら時の流
れを感じている彼女がいて、その心がありありと見えて来る。

石山寺に「詣で着」いたのは「暮れかかるほど」であったという。

『新修大津史市』古代（第一巻）において村井康彦氏は「石山寺」に關して、

良弁らうべん僧正によつて開創されたと伝えられる石山寺は、当初檜皮葺の仏堂一宇のほかは板葺板屋・板倉などわずかな建物を数えるにすぎなかつたが、造東大寺ぞうとうだいじ司管下の造石山寺ぞうしやまじ所による造営によつて、天平宝字五、六年（七六一、七六二）頃には仏堂が間口七丈・奥行五丈・高さ一丈四尺と大きく改められたばかりでなく、経蔵・僧房・写経堂・法堂・食堂（注七）など二〇数字に及ぶ建物がつくり出され、またそれとともに写経所では大規模な一切経の書写が行われている。とその建物について大まかに説明されていて、その概容を知る事が出来よう。

『藤原仲文集』に

御嶽精進すとて、石山にこもりたる、女くら人まゐりあひて、とはず侍りければ

いづくへも身をし変へねば雲かかる山伏見てぞ問はれざりける

返し

鳥のねも聞こえぬ山にいかでかは雲路を分けて人の通はむ

との贈答が見えて、これによれば石山寺辺は「鳥のねも聞こえぬ山」と思われていたことがわかる。

また、『枕草子』「寺は」の段に

寺は壺阪。笠置・法輪。高野は、弘法大師の御すみかなるがあはれなり。石山。粉河。志賀。

と見え、萩谷朴氏は清少納言が「一度でも参詣したならば、何がしかの感想を懐いて、それを『枕草子』に記載せずにはいられない程の有名寺院ばかりであるから、案外、清少納言には、参詣の経験が無かつたのかもしれない」と述べられたが、石山寺が「鳥のねも聞こえぬ」あたりでありながら、それでも都人にとりわけ親しまれたのは、やはり観音信仰の靈

地ゆえであつて、多くの参詣者を迎えることになつたのである。

平安時代の石山参詣は、延喜十七年(九一七)宇多法皇のそれをもつて嚆矢とする『石山寺縁起絵巻』巻第一第五段(詞書)に、

亭子の御門(帝)、常に当寺に臨幸あり。国の司、「民の疲れありなむ」と言ふ由を聞(こし)食(し)て、国々の御莊などに仰せて、御儲けを仕らせて、延喜十七年九月廿日余りの比、詣で給(ひ)けり。(注10)

と宇多法皇の参詣を告げ、『同絵巻』巻第三段(詞書)に、

正暦三年二月廿九日、東三条院、当寺に臨幸あり。御共(↓供)には、中宮大夫道長直衣を着す。左衛門督顯光、大宮権大夫伊勢、兩人は束帯を着す。(注11)……

とも見えて、東三条院詮子の石山詣でを記している。詮子は統いて

長徳元年(九九五)二月二十八日(小右記)

長徳三年(九九七)三月八日(日本紀略)

長保二年(一〇〇〇)九月八日(権記)

などにも石山参詣を行なっている。長保三年九月の参詣は詮子四十賀を前にしてのもので、『栄花物語』巻第七(とりべ野)に、

京で出させ給ひて、粟田口・関山の程、鹿の声もの心細う聞こゆ。よろづあはれにおぼしめされて

あまたたびゆきあふ坂の関水に今は限りのかげぞ悲しき

との給はすれば、御車に侍ひ給ふ宣旨の君

年を経てゆきあふ坂のしるしありて千年のかけをせきもとめなん

とぞ申し給ふ。

と語っている。

女性の参詣者は、他に右大将道綱母が天禄元年(九七〇)七月二十日ごろ(『蜻蛉日記』中卷)・和泉式部は長保五年(一〇〇三)八月某日(『和泉式部日記』)を、また『赤染衛門集』には、赤染衛門が

長和二年(一〇一三)秋

長和三年か四年(一〇一四、五)

寛和元年(一〇一九)

の三度参詣したことが記されている。

こうした観音信仰への時代の流れに沿って石山に向かった孝標女は、「暮れかかれるほど」に石山寺に到着した。彼女は当日早朝に京の自邸を出発したことであろう。道綱母の場合は「明けぬらむと思ふほどに出で走り」、「申の終はりばかりに、寺の中につきぬ」と日記に見える。和泉式部の場合は「かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむ」と、石山に詣でて七日ばかりもあらむとて、詣で」たが、出発時・所用時間の推測は無理である。

孝標女は道綱母と同様、一日を費しての石山到着を考えてよかろうと思われる。

四

天禄元年七月二十日ごろの道綱母の石山詣でにおいて、彼女は「御堂にてよろづ申し、泣き明かして、あかつきがたにまどろ」んで、

この寺の別当とおぼしき法師、銚子に水を入れて持て来て、右のかたの膝にいかく

との夢を見、「仏のみせたまふこそはあらめ」と思ったものである。『蜻蛉日記』中巻にくわしい。

また、孝標女も、彼女の母が「一尺の鏡を鑄させて」僧を出だし立てて初瀬に詣で」させた折、「御帳の方より、いみ

じうけだかう清げにおはする女の、うるはしうさうぞきたまへる」が、僧の夢に現れた。長元六年（一〇三二）、孝標女二十六歳のことであった。

そして、永承元年（一〇四六）十月二十五日から十一月一日まで、初瀬詣でを決行した折のこと。「三日さぶらひて、暁まかむとてうちねぶりたる夜さり」に、「すは、稻荷より賜はるしるしの杉よ」と言つて、物を投げ出す夢を見たのであった。

「鳥のねも聞こえぬ山」で「山風の恐し」く吹きわたる「石山寺」のあたり。そんな場所で籠ることで「散乱する魂を癒し鎮めよう」とする。(注11)それは「夢の告げを乞うための祭式的隔離であつて、(注12)今回の孝標女の石山詣でにおいても、やはり夢の告げを得ていたのである。孝標女・道綱母の初瀬詣でもその例に洩れない。

彼女は、まず「ゆやにおりて御堂にのぼ」つた。山風の恐ろしさに「おこなひさして」まどろんだところ、「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」という夢を見た。

まず、「中堂」について確認しておく、「比叡山の根本中堂」・石山寺の「中堂」の二説が見える。また、池田利夫氏は『石山寺縁起絵巻』巻第二・第三段の詞書に

やかて通夜してよもすからおこなひあかして侍けるにすこしまとろみたる夢に内陣より麝香をたまはりてとくかしこへつけよといふ人あるとみてうちおとろきて夢なりけりとおもふに……

とあるところから、「比叡山の根本中堂を指すかといふ説もあるが、これは内陣と同じで、石山寺の本尊を安置した堂と解すべきであろう」と述べられた。(注13)

『石山寺縁起絵巻』の詞書は『住吉家鑑定控』によれば「石山座主梶守僧正筆」とのこと、この説に従えば同絵巻詞書の草された頃は「内陣」と考えていたことになろう。

「仏殿の内部で仏像や祖師像などを安置した場所を内陣といい、その前面の参詣者の席を外陣という」(『総合仏教大辞

典』法藏館・下)のであって、「中堂」は「金堂」のこと(石山瑞麿『例文仏教語大辞典』小学館)である。つまり、一寺の本尊を安置した堂が本堂(金堂・中堂)であって、その堂が内陣と外陣とに分かれているわけである。

『更級日記』は

またの日も、いみじく雪降りあれて、宮にかたらひ聞こゆる人の具したまへると、物語して心ほそさをなくさむ。三日さぶらひてまかぬ。

と、寛徳二年「霜月二十余日」の石山詣での条を閉じている。

この石山詣での記を大雑把にまとめれば、見事に京から近江への一日とおぼしき道中を辿ることが中心であって、石山寺での参籠に関しては削りとられた感が至って強い。これは既に多くの人々によって指摘されたことであつた。たとえば岡崎和子氏は「物語で」の属性として、次の三点にまとめて詳述されている。^(注)それは

(1) 物語での娯楽性

(2) 物語での途中や目的地でさまざまな余興・遊宴をもつことがある

(3) 物語での社会性(社会性をも含めて)

であるが、『更級日記』における寛徳二年の石山詣では、特に(3)に関わる点が見うけられる。それは「物語では、方違えなどと共に、外出の機会の少いころの女性たちにとって、自然鑑賞のよい機会であつた。つまり、逢坂の関の風^(注)に身をさらし、「関寺大仏」に感動を燃焼させたのも、「社交性」として加えることが許されるであろう。

五

孝標女が再度石山詣でを行なつたのは、「二年ばかりありて」であつたと日記は記す。この「二年ばかり」を

(1) 初度石山詣での二年後

(2)再度石山詣での直前に記す「鞍馬詣で」の二年後

のいづれか判然としない。だが、後者の方が相応しいであろうとする大勢に従えば、永承四年（一〇四九）作者四十二歳の時で、初度石山詣でから四年後ということになる。

その折、彼女は「よもすがら雨ぞいみじく降る」と思い、「旅居の雨」の鬱陶しさを感じつつ、「葎をおしあげて見れば」、「木の根より水の流るる音」を雨とあやまっていたことを知った。そこで彼女は、

谷川の流れば雨と聞こゆれどほかよりけなるありあけの月
と詠じたのであった。

再度石山詣での条はこれにて閉じられていて、「参籠の視座は据えられることなく、外界の事象が記し留められる」のみであって、初度に比べてあまりに短い条である。勿論、参籠に関する記録・感想などは見られない。

だが、ここには燦然と輝く孝標女の感性がある。「有明けの月の谷の底さへくもりなくすみわた」ったという、月光の澄みのぼるさまは読者の視覚に訴え、「木の根より水の流るる音」は、読者の聴覚に強烈に響くものがある。

こうした作者の持つ感性とそのきらめきに、読者は感動すらおほえるに相違ない。

二度の石山詣でにおいて、彼女は二首の歌を詠じているが、それらの歌はいずれも王朝時代に詠じられた多くの歌からずれることのないものであった。

六

孝標女が二度の石山詣でにおいて、彼女が日記に記した通過地点を辿ってみよう。

初度石山詣で

(1)逢坂の関

(2)関寺

(3)打出の浜

(4)石山寺

再度石山詣で

(1)石山寺

となり、石山寺は当然のことにして再度に記され、全四地点となる。

その中において、逢坂の関に関しては「昔越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるるに、そのほども、いとあらうる吹いたり」と、十三歳の折の上総からの帰路のさまを思ひ返していた。それは関寺についても同様であつて、「そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり」を懐かしく思い出している。また、打出の浜についても同様に「見しにも変わらざ」と触れている。ただし、打出の浜を「見し」時が上総への下向時か、上総からの帰京時かと問えば、いずれとも決しがたい。

『更級日記』は孝標女十三歳の状況から記し出されているが、『御物本勘物』には

寛仁元年正月廿四日任上総介。

四十五

と「孝標」の条に記されていて、これによれば上総への下向時に打出の浜を過ぎたのは正月廿四日以後で「春」ということとなるのか。一方、上京の折は十二月二日で「冬」であり、その季節から考えれば「見し」時は上総からの帰洛時であらうとするのが、より相応しいであらう。

さて、寛仁四年十二月の帰洛時において記された、近江の国の地点は、

湖のおもてはるぼるとして、なで島、竹生島などいふ所の見えたる、いとおもしろし、勢多の橋みなくづれて渡りわづらふ。粟津にとどまりて、師走の二日、京に入る。暗くいき着くべきと、申の時ばかりにたちて行けば、関近くなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六の仏の、……と記されていて、

(1)湖

(2)なで島

(3)竹生島

(4)勢多の橋

(5)粟津

(6)関寺

と続いている。この中で、後年作者が石山詣でにおいて通過した地点は、勢多の橋・粟津・関寺である筈というのに、作者は勢多の橋・粟津については触れていない。

作者は寛仁元年（十歳）・寛仁四年（十三歳）の二度近江の国を通過した筈である。ところが、上総下向時のことは後年の帰洛時にほとんど記さなかった。記したのは

その渡りして浜名の橋に着いたり。浜名の橋、下りし時は黒木をわたしたりし、このたびは、あとだに見えねば舟にて渡る。

の―線部のみであった。

こうして眺めてみると、孝標女は『更級日記』を草するのの際して、無意味な重複と思われるものは見事に避けて来たことが、おのずから明らかになる。それは二度の石山詣での記においても例外ではなかった。

そして、二度の石山詣での記において、彼女がとり上げた逢坂の関や関寺などの四地点は、いずれも世の人々の強い意識の内にある「歌枕」であった。

すでに、上総からの上洛の記に見える地名の、その多くが歌枕であったことは、先学の指摘に見える。だが、それは上洛のみではなく、物詣での記においても言えることだったのである。

初度石山詣でに続いて記す、永承元年（一〇四六）十月二十五日、「大嘗会の御禊とのしる」日に出発した初瀬詣でについて、序ながら確認しておこう。

二条の大路・法性寺・宇治の渡り・やひろうち・栗駒山・贅野の池・東大寺・石上・山辺・初瀬川・奈良坂・宇治の網代

と続き、「贅野の池のほとり」・「山辺といふ所の寺」で宿泊し、宇治川では音にのみ聞きわたりこし宇治川の網代の浪も今日ぞかぞふる

の一首を添えていた。

これらの、孝標女が記した地名の多くは、やはり歌枕として人々に知られていたものであった。

- (注1) 本文引用は『日本古典文学全集』(更級日記)によった。
- (注2) 『日本古典文学全集』(更級日記・三四二頁)
- (注3) 「よしなし。事からうじて……」と読む説は採らない。
- (注4) 『更級日記の研究』(一七頁)
- (注5) 小谷野純一『更級日記全評釈』(六三二頁)
- (注6) 『女流日記文学講座』(第四卷・一一〇頁)
- (注7) (五〇八頁)
- (注8) 『枕草子解環』(四・二三三〜二三四頁)
- (注9) 日本の絵巻16『右山寺縁起』(一一〇頁)
- (注10) 注9参照(一一二頁)
- (注11) 西郷信綱『古代人と夢』(五八頁)
- (注12) 注11参照(五八頁)
- (注13) 玉井幸助『更級日記新註』(一九〇頁)
- (注14) 注5参照(六三九頁)
- (注15) 『更級日記 浜松中納言物語攷』(七〇頁)
- (注16) 小松茂美(注9参照・一〇五〜一〇六頁)
- (注17) 『平安朝女流作家の研究』(三〇〜三四頁)
- (注18) 注17参照(二三三頁)
- (注19) 注5参照(六九五頁)